

ACS 症例における OCT の特徴

¹東邦大学医療センター大森病院、²東邦大学医療センター大森病院

坂口 智美¹、田中 雅博¹、藤井 毅郎¹、矢部 敬之²、天野 英夫²、池田 隆徳²

【背景】当院では、急性冠症候群（以下、ACS）症例で選択されるイメージングデバイスは、主に IVUS が用いられている。IVUS の選択理由として、臨床工学技士における準備・使用方法の簡便性や、造影剤の使用量を減らす目的などが挙げられる。しかしながら、病変部のモルフォロジー観察においては、IVUS よりも OCT の方が得られる情報が多く、近年では OCT ガイドの治療が増えている。【対象】2025 年 6 月から 2026 年 6 月までに ACS で緊急 PCI を行った 127 症例の内、OCT を選択した 10 症例を対象とし、OCT での形態的特徴を観察した。症例の内訳として STEMI が 8 症例、NSTEMI が 2 症例であった。【結果】責任病変はすべて近位～中位病変で、RCA : 5 症例、LAD : 3 症例、LCx : 2 症例、狭窄率は 90%～100%であった。OCT 所見は、プラークラプチャが 5 症例、石灰化結節に伴う血栓形成が 2 症例、プラークびらんが 1 症例、血栓形成のみが 1 症例、線維性プラークと石灰化プラークを伴うのが 1 症例であった。【まとめ】OCT を用いることで病変部の性状が把握しやすく、デバイスの選択に役立つと考えられた。石灰化を伴う混合プラークの症例において、高度石灰化であればデバルキングが必要となる場合が多く、OCT であれば石灰化の厚みを計測できデバルキングの有無を決定しやすい。血栓形成のみの症例は、OCT でプラークが無いことが確認でき Aspiration のみで治療を終えている。【結語】急性期治療での OCT によるモルフォロジー観察は、デバイス選択などの戦略に役立ち、責任病変のみの治療とし手技時間の短縮にもつながる。